

「空相一油土」について

中村一美

関根伸夫氏より14歳年下の私にとって「空相一油土」(1969年)は、いったいどのような意味を持つものなのか。

私は同じもの派の榎倉康二氏の指導を東京藝術大学で受けていたこともあり、多摩美術大学出身の関根氏とは全く面識がなく、実際に直接お会いしたのは2015年の私のBlum & PoeギャラリーLAでの個展のオープニングの時であった。そんな私がテキストを寄せる資格があるのか、はなはだ心許ないが、もの派以降の世代のテキストとして読んで頂ければ幸いである。

「空相一油土」の発表時1969年にはもちろん実見しておらず、学生時代1977～78年頃に雑誌で見ただけである。ただ、その時に異様な印象を持った事だけは記憶している。代表作の「位相一大地」がある意味、論理的な整合性の印象を私に与えたのと異なり、ぶっきらぼうな物質的存在の有り様が印象深かった。

榎倉氏の作品もそうだが、もの派の作品は、当時の私にとって、物質面と操作面の微妙な整合性が特徴であるように感じていた。つまり、モノをモノに見せないような“配慮”そのものが主題であるような。それは、ハイデガー流の西洋的な“気遣い”とも異質な、“配慮なき配慮”のようなものとも言えた。

関根氏の「空相一油土」は、そのようなもの派特有の“配慮なき配慮”が全く感じられないまでに、油土の物質性が強調されている。そもそも油土は、小学校での美術の授業で一般的に使われなじみがある。そうであるが故に、その量塊と投げ出されたかのような扱いに衝撃を受けたのである。

この作品は、関根氏は否定するかも知れないが、ある意味非常に表現主義的な作品でもある。油土を扱う美術家の主体が、ここでは漏出している。もの派は、そのような主体の発露や表現性を忌み嫌ったが、「空相一油土」では反転して、それらの特徴が前面的に展開しているように感じる。

私は1976年に大学に入学しているので、もの派がインスタレーションから絵画表現へと移行して行く時期に遭遇した世代である。つまり、「空相一大地」の衝撃は実体験しておらず、70年代後半のもの派の絵画から、逆説的にもの派のモノの理念を学び、影響を受けた世代である。

その中で、この「空相一油土」はインスタレーションとして、特に印象が強く残る作品であった。

第一の特徴は、大量の油土は無造作な作業の連続で積層されながら、それを収めるギャラリー（あるいは現場空間）との空間的比率において過剰には至ら

ず、その暴力的な物質性が“静謐さ”を帯びる状況に転換されている。つまり、油土よりも、それらを取り巻く“無”の空間を意識させるように転換されている。（これは隠された“配慮なき配慮”か？）

第二には、油土の塊が成形されつつある時の異様な身体的エネルギーの集中性の生々しさである。この身体的表出性は、私のY字型の絵画群においても頻繁に見られる特徴である。

そして両者に共通するのは、その強力な表出性が、関根氏では“配慮なき配慮”によって隠蔽され、私では、Y字型という構造によって隠蔽されるという事である。一見表現主義的だが、内実は異なるという事。

2015年以降、たった3度しかお会いする機会がなかった関根氏ではあるが、長年強い印象を持っていた作品「空相一油土」について僅かでも記すことが出来、関根氏への追悼の気持ちが伝えられれば幸いである。

2020年4月25日